

ピアノ

加藤文子

都内の住宅街にあるギャラリーをめざして歩いていたら、どこからともなくピアノが聞こえてきた。

歩みを進めるうちギャラリーに近い角のお宅だとわかった。白いペンキの施された木造の家、落ち着いていてなつかしさも感じられる。ピアノの音色が似合っている。

小さな子供がおさらいをしているのだろうか。ポロンポロン、つつかえてはやり直しながら弾いている。私が習いはじめた頃の覚えのあるメロディ、バイエルかしら……。

三味線が上手だった祖母は、私がものごころつく頃から教えようとした。撥ぼちを握る私の背後から両手をまわして「ほら行くよ」と、はじまる。同じ敷地に住んでいたので、顔を合わせるたびに、「やるかい?」と、呼びとめる。

いつまでたっても三味線に馴染めないの、祖母の熱もさめていった。



小学校に通いはじめて間もなく、隣のおばあさんにO先生を紹介されて、ピアノを習うことにした。ピアノはやってみたいと思った。

隣は病院で外科が専門らしかったが、カゼでもなんでも近隣の住人はかかっていた。

祖母と隣のおばあさん、つまりM医師のお母さんであるウテナさんとは理由は知らないが、仲が良くなかった。

三味線を選ばずウテナさんのお世話でピアノを習ったことで、祖母は気を悪くしていた。あうとよくため息をつくのだった。

当時、ピアノを買えるような経済事情ではなかったので、はじめはウテナさんのピアノで練習させてもらった。

学校から帰宅すると、広い敷地のM医院をたずねる。大きな玄関から家の方^{かた}をお呼びして、都合が良いとピアノのある奥の部屋へ通される。

祖母とは仲が良くないのに、私には良くして下さったウテナさん。先生を紹介して下さい、ピアノを貸して下さいだったり、そこにはどんな経緯があったのか、判らないことがいろいろある。

毎日通えるわけではないので、家では父が用意してくれた紙の鍵盤に指を当てて練習した。飽きずに続けているので、しばらくして中古の電気オルガンを買ってもらった。

オルガンが来てからは、隣でお世話になる機会は減った。

それでもオルガンとピアノではタッチが違うので、ピアノで弾くことは大切だというO先生からのアドヴァイスを受け、時々ウテナさんをたずねるのだった。

その後、O先生の結婚を機に町内に住むK先生のもとへ通うことになった。

O先生はふくやかな容姿そのもののような感じの方だった。一方、K先生はモリスやロセッティが描く女性を思い出させる面長の顔立ちで、西洋風の雰囲気があった。

母とお願いにあがった時、「本気でやり続けたいのですか」と、聞かれた。強い気持ちもないまま、思わず「はい」と答えてしまった。レッスンの内容も異なり、以前のようなのんびりした気分ではついて行けなくなった。

成り行きから、専門的な音楽教育を受けられる中学校の入試をめざすことになった。

そうであるならばと、両親は奮起して月賦でピアノを購入。ベニヤ張りの増築した狭い部屋にピアノを置いて、毎日二時間ほど練習に励んだ。小学五年生頃までのこと。

貧しい生活の中、なぜピアノを習わせてくれたのか。ひとつには、生まれつき足に障害のある私の将来を案じてのことだった。

結婚もむずかしいとの見解から、ピアノで生計がたてられるようにしたらどうかと思っていたらしい。祖母も同様の思いからだろう。「この子には芸を身につけさせないとね」と言っていたのを覚えている。

もうひとつ。これは後になって伯母から聞いたこと。

歌うことが大好きだった父は、音楽の道考えたこともあったそうで、結局断念して家業の盆栽屋を継いだ。父がレコードを聴いていると一緒に喜んで耳を傾げる私にピアノを習わせ、夢を託したかったようだ。

「ピアノが家の中から聞こえてくる毎日は楽しい」と、よく言っていたそうである。

拙い調べをそんなふう聞いてくれていたのだ。

ところが、私はというと、音楽学校中等科に進学したものの途中ではぐれてしまい、退学するところになる。

言いたいことが山ほどあっただろうに、「やめる」と告げた時も父は何も言わなかった。

儉約を重ね、いっしょうけんめい働いて学費を捻出してくれたことなど考え及ばず、私は自分を通したのだ。生前、父はそのことを話題にしたことはない。

いろいろが思い起こされ、ハアアアッと心が霞んだまま見知らぬ家から聞こえてくるピアノを聞いていた。



小さな鉢の中で育つ カツラの盆栽 18歳 Photo / Kato fumiko